

自然との共生

環境委員会 専門員

やました たかひさ
山下 孝久

自然は大きな恵みをもたらしてくれるが、ときに大災害を引き起こし、人間に牙をむく。人間と自然との関わり合いをいくつか述べたい。

森と海とは有機的につながっている。日本の国土の約7割は森林であり、約2万1千本の河川（一級・二級河川）がある。森林は、水を育み、森の豊かな実りを与えるとともに、災害を防ぎ、河川の流れを通じて、様々な栄養源を海に供給し、豊かな海づくりにも貢献してきた。その意味で、漁業の町のお祭りに出てくる「丘万作、浜大漁」という祈りの言葉には含蓄深いものがある。森、川、海が一体となった自然の循環が生態系を守っている。例えば宮城県気仙沼では良いカキを育てるために、気仙沼湾に流れ込む大川上流の室根山に落葉広葉樹を植える「森は海の恋人」運動が平成元年から行われてきた。これまでに約3万本を植林している。また、川の流域で暮らす子供たちを海に呼んでの体験学習も行われ、森の養分が海に流れ込むことで魚が捕れることを学んでいる。

岩手県の最南端に位置する陸前高田市の「奇跡の一本松」にもいろいろな思いがある。江戸時代に防潮林として約7万本もの松が植えられ、国の名勝「高田松原」として親しまれてきた。それが、平成23年3月11日の東日本大震災の大津波で一本の松を残し、すべてなぎ倒された。津波に耐え奇跡的に残った一本松であったが、平成24年5月に塩害の根腐れによる立ち枯れが確認された。同年9月、市ではこの一本松を「希望の象徴」のモニュメントとして保存することを決めた。保存の費用1億5千万円については、税金を使わないですべて現在募集中の保存募金で賄う計画である。「死んだ木に大金をかけるのはいかなものか」「市民の生活再建に充てるべきではないか」との声もあったが、防災メモリアル公園内に復興のシンボルとして今後も後世に受け継いでいくこととした。平成25年3月に復元される「奇跡の一本松」が津波の脅威を後世に伝えるとともに、希望のシンボルとして周りの人びとを元気づけてくれるに違いない。

この度平成25年で62回目を迎える伊勢神宮の式年遷宮についても触れたい。式年遷宮とは、20年に一度、すべての建物を現在の社殿の隣の用地に新しく同じに造りかえるというものである。では、今の社殿のヒノキなどの木材はどうするのか。実は、そうした木材などは、全国の神社で再び利用される。ちなみに今の大鳥居の柱は、前回の式年遷宮の際に、旧社殿の柱を利用して造られていた。一回の式年遷宮で1万本のヒノキが必要とされる。式年遷宮に合わせて、造林や間伐が行われ森林が整備されていく。今回、ヒノキの間伐材や旧社殿の木材も東日本大震災で被災した神社で使われる見通しである。約1300年以上にわたり式年遷宮が行われる中で、リサイクル(循環)の思想が連綿と受け継がれている。

改めて自然の脅威への怖れを忘れることなく、自然の恵みに感謝し、森の命を未来につないでいくという日本人の自然との関わり合い方に思いをはせていきたい。2012年10月、インド・ハイデラバードで開催の生物多様性条約COP11のスローガンは、“Nature Protects if She is Protected” 「自然が守られれば、自然が守ってくれる」であった。